

日本刺繡の歴史的考察

奥平志づ江

1. まえがき

縫い取りによって布帛に装飾を施す刺繡の技法は東洋では紀元前千年頃モンゴルで、西洋では紀元前三千年頃エジプトで始まったと伝えられているが、日本刺繡の最古の作品として現存するものは飛鳥時代(621年)のものである。

その発展過程についてみると西洋では貴族階級、主として宮廷における婦人の趣味、教養として継承されてきたのに対し、東洋では専門的技芸職人による職業として発展してきた様である。然し初期の作品は何れも布帛に繡仏を像った宗教的なものであることは一致している。以下おもに日本刺繡の現存する作品について時代

を追って紹介し、併せてヨーロッパ刺繡の流れと比較考察してみたい。

2. 日本刺繡の代表的作品について

(1) 飛鳥時代(400年~710年)

刺繡はこの時代に、他の文物と共に支那から日本に渡来したもので、日本における最も古い刺繡作品として、中尊寺蔵の「天寿国曼荼羅繡」(写真1)がある。これは聖徳太子の妃が太子の死をしのんで、天寿国の浄土の図を想像して、621年に侍女達に作らせたもので、信仰と聖徳太子の追慕の情をよく表現した荘重な作品である。色系は濃淡の黄、茶、紅、臙脂、緑、藍、紫などを使い、平繡、纏い繡、絡み繡の手



天寿国曼荼羅繡張(写真1)

法によって美しく繡われている。

(2) 奈良時代 (711年~794年)

この時代の刺繍作品として正倉院御物(756年)「花樹孔雀文刺繍」(写真2)がある。これは幡(はた)の残欠で、刺繍の文様にも、しぼり染による線のぼかしにも、天平文化の一端を忍ばせるものがあり、紫の綾地に、上部には花園に遊歩する孔雀を、下部には花樹一株を配し、黄、緑、紫、赤、縹(はなだ)色等の濃淡の緑が紫の綾地と調和して華麗な作品である。繡の手法はこの時代に多い平繡が主で、草花の



花樹孔雀文刺繍 (写真2)

茎などには鎖繡を用い、その他技術的にむづかしい両面繡を交えている。

(3) 平安時代 (794年~1185年)

この時代の代表的作品として刺繍「釈迦説法図」(写真3)をあげることが出来る。これは全体が鎖繡と玉繡で繡われており、釈迦の突き出した腕や胸、肩の筋肉の盛上った逞しさを繡



釈迦説法図 (写3真)

の方向によって立体的に力強く表現したみごとな説法図である。

(4) 鎌倉時代 (1186年~1333年)

この時代には多くの新興仏教が興り、仏教全体が活気づいたため、仏教的色彩の濃い作品が数多く遺されている。

その代表的刺繍作品には「普賢十羅刹女像繡図」(宝厳寺蔵)「阿弥陀来迎図」(東京国立博物館蔵)「種子阿弥陀三尊」(当麻寺蔵)があるが、これらの特色は故人の遺髪をまぜて刺繍した、所謂「髪繡」といわれるものである。

(5) 室町時代 (1334年~1573年)

この頃中国では元が亡び明朝が樹立されて蒙古人の支配から再び漢民族の手に復帰したため、明朝の文化が日本の刺繍にも大きく影響して、この時代の作品には中国的な幅と厚みを加えた華やかなものが多い。染織技術も急速に進み、「名物裂」が多く作られたのもこの頃である。



刺繍十六羅漢像 (写真4)

金糸を交えた色系で花鳥模様を豊かに繡い現した所謂「明繡」は当時の寺院の打敷や法衣に用いられており、桃山時代の「縫箔」の技法もこの頃に始まる。

「刺繍十六羅漢像」(写真4)は当時の有名な作品の一つである。

(6) 安土、桃山時代 (1574年~1603年)

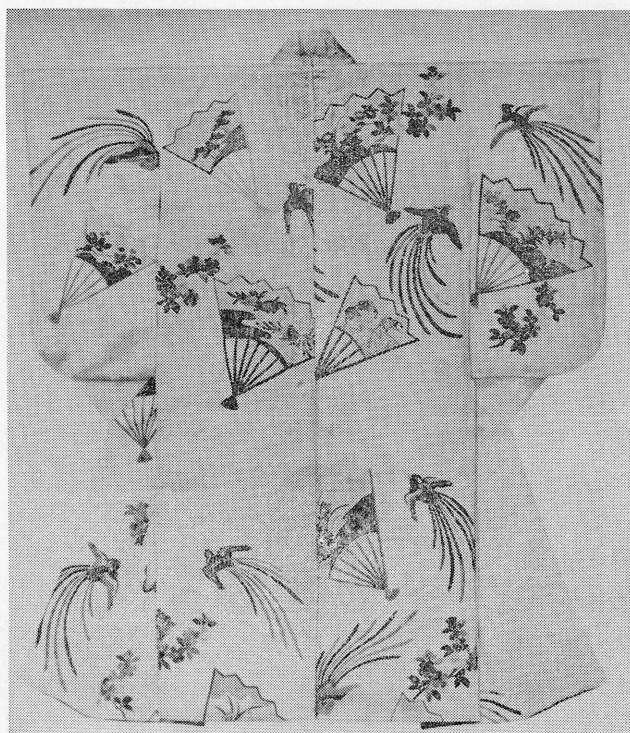
この頃より繡仏は見られなくなり、刺繍は主として衣裳の装飾に用いられるようになった。刺繍の題材としては宗教的色彩のない自然の風物、人物が選ばれ、その模様には豪華な意匠をこらしたものが多く見られる。その当時の作品に「白地竹に扇、尾長鳥模様繡箔の能装束」(写真5)がある。これは竹の地紋の綾子地に金の摺箔が一面に

施してあり、その上に尾長鳥(中国的な鳳凰を日本的な可愛い小鳥に変えた想像の鳥)と、扇中に雲形や細い麻の葉を網目菱つぎなどで繡ってある美しい作品である。

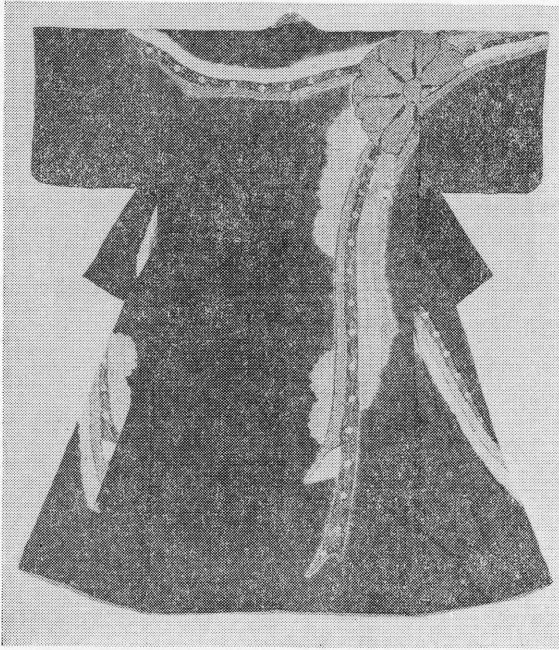
(7) 江戸時代 (1604年~1867年)

江戸期は桃山染織の発展期ともいわれ、繡よりも染を主体とした作品が多く、桃山風の図柄がすべてに見られ、屋内外の遊宴にいろいろな色彩を施した精巧な絞りや刺繍の小袖を衣桁にかけたり、網に渡して小袖幕にするなど環境装飾に華美を誇る風があった。「納戸綾子地 熨斗文様絞繡小袖」(写真6)は江戸期の作品で、鮮かな藍色の中に瑠璃色の絞り染がしてあり、その周囲を細かい繡で柔らかく自然にぼかした美しい小袖である。

江戸中期に至って刺繍は漸くワキ役的になり、桃山期に見る様な主体的な図柄の展開は見られなくなった。「縮緬地源氏物語文様加賀友禅繡



白地竹に扇尾長鳥模様繡箔の能装束 (写真5)



純戸縷子地熨斗文様紋縷小袖 (写真6)



源氏物語文様加賀友禅染小袖 (写真7)

小袖」(写真7)には上半身に散らされた若紫(わかむらさき) 箒木(ははきぎ) 空蟬(うつせみ) 紅葉賀(もみじが) 未摘花の文字が若草色と金茶色とによって平繡で刺繡されている。下半身には海辺の柔い絵画風の模様で表現して、上半身の漢字や図型の堅い感じを補う等、意匠構成のたくみさがうかがわれる。配色も多く、刺繡も繊細な針足で「まつい繡」「繡切り」の手法を使いわけており、すばらしい作品である。徳川幕府は治世の基礎が固まるにつれて格式によって律しようとする政策をとったため、その傾向が刺繡の上にも波及し、次第に独創的な図柄は影をひそめてきた。しかしこれに抗して富裕な町人はその慾求不満のはけ口を贅沢趣味に向け、消費の対象に高価な刺繡の衣裳を密かに用いる者が多くなった。この頃の徳川大奥では、御台所の御召物に総繡取りの贅をつくした華麗なものが多く見られる。江戸末期の刺繡作品「白縷子地花丸文様繡振袖」(写真8)は草花や樹木を円に形どった花の丸の模様を繡いとしてある。これは日本刺繡の特色ある優れた文様の一つで「鹿の子の感じを刺繡で表現してあり、明治初期のものかと思われる程新しさを感じさせるが、茶の刺繡糸が一部抜け落ちている点から天然染料で染めた糸であろうと考えられるので、やはり江戸末期のものである。

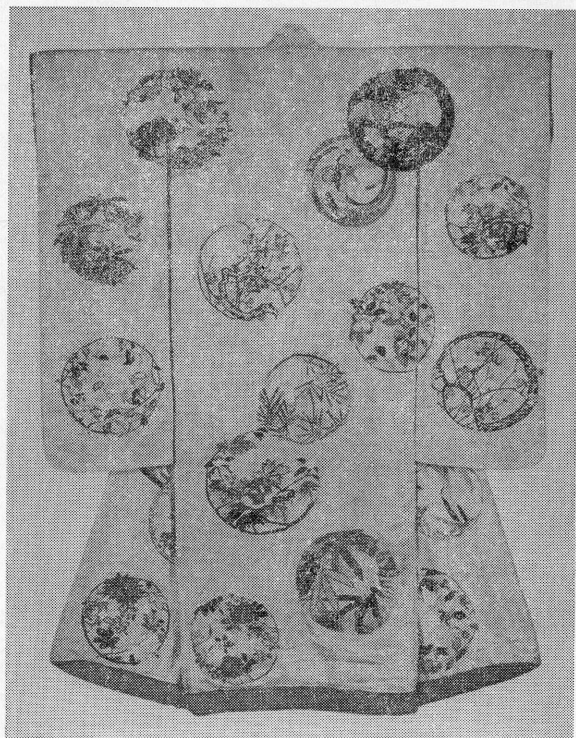
(8) 明治以後

以後明治時代に入って急速に化学染料が発達したため、染織技術とともに刺繡の様式・構図は大きく変化し、天然染料を用いた伝統的なものより、全く新しいものが続々と輩出し、実に多種、多彩、百花撩乱の状態となった。

図柄は全体的に刺繍を施したものより部分的で離散した個別的なものが多くなり、技法も昔ながらのオーソドックスのものから大きく脱皮して、画的・独創的のものがふえ、肉入れなどを施して立体感を出したり、魚・鳥の目等にガラス玉をつける等数多くの新しい技法が見られるようになった。何といたっても手工芸全般において、明治時代ほど職人の腕が技術的に冴えた時はなかったといわれる。大正、昭和となって、好、不況の景気の波とともに染織や刺繍の模様・意匠も、時には華麗な桃山風や元禄風のもの復活したり、簡素なものに衰退したりして、幾度か変遷をくり返してきたが、また一面生活様式の変化とともに西洋の図柄・技法・素材を適当に織り混ぜた独創的なものも増々殖えてきたようである。

3. ヨーロッパ刺繍について

ヨーロッパ刺繍の起源はエジプトのコプト時代(4~7世紀)の繡である。コプトの刺繍はビザンティン帝国の刺繍から寺院手芸へと受けつがれていったが、それらはキリストの生涯や聖人、聖書物語などをモチーフとした最初のもので、ヨーロッパ刺繍の伝統を形成している。13世紀頃よりヨーロッパ各地で修道会が生まれ、尼僧院では刺繍を主体とする手芸が盛になった。僧院手芸は神々への奉仕及び伝道のために、キリスト教の種々の伝説、聖人伝などをテーマとして僧侶の法衣や祭壇の覆い、掛布などに刺繍を施したもので、中世芸術の一つに数えられる。僧院手芸は16世紀まで続いて中世刺繍の黄金時代をつくった。中世のヨーロッパ刺繍のもう一つの流れはアングロサクソン人の手になるスカンジナビアのそれで、代表的なものには11世紀に作られた「マチルド女王のタピストリー(tapestry)」がある。これは幅6m長さ約70mの



白綸子地花丸文様繡振袖(写真8)

細長い麻布に、ヘースチングの戦い(1066年)——ノルマンジー公ウィリアムのイングランド征服の戦争——をテーマにした絵巻物のような体裁の刺繍で、現在フランスのバイユー美術館に保存されている。11世紀以後刺繍は全ヨーロッパに伝わり、特にイタリア、フランス、ドイツ、イギリス、スペインで盛になったが上流婦人の必須の嗜みとされ、王妃や女王が自ら宮廷の侍女たちを指導して刺繍作品を作った。中世の刺繍は宗教的な意匠の寺院装飾が多かったが、ルネッサンス以後は一般室内装飾にも移行し、カーテン、壁掛、家具覆い等に広く用いられるようになった。フランスでは刺繍は十字軍によって伝えられ、発展して16~17世紀には黄金時代を迎えた。フランス刺繍はダマスコ(damask)やブロケード(brocade)、ベルベット(velvet)などに金糸や色糸で刺繍したもので当時は主として宮廷人の衣服に用いられた。金糸で繡

った所謂「ゴールド・エンブroidアリー」(gold embroidery) はその一つで繡によって着用者の階位や権威を示す興味深いものである。18世紀になるとヨーロッパ刺繍はロココ時代の風潮を反映して華やかな様式に変ってきた。当時のフランスではボンパドール夫人が刺繍の流行の作り出し手となって、リボン刺繍など新しい技法をみだした。しかし1789年フランス革命が起きると宮廷や教会を飾っていたヨーロッパ刺繍作品の大部分が壊され消失して、衣服を刺繍で飾ることも次第に少くなり、19世紀になって染模様を主体とするものに変ってきたようである。

4. むすび

日本刺繍の流れを各時代の作品について追って見るとき、絹の素材(糸・織物)の上に発展して来たことがわかる。ヨーロッパの刺繍は古くエジプトに発祥して、ローマ文化とともにヨーロッパ各地に伝播したものであるが、素材は麻に始まっており、絹を用いるようになったのは中国、日本より大分後れている。このことは

刺繍の技法が西より東に伝播して、絹文化(織物・染色)の発展とともに日本において華やかに開化したことを考えさせる。又構図(図柄)、用途は仏教とキリスト教の相異は別として、何れも宗教的なものに始まり、次第に室内、衣裳の一般装飾用に発展してきたことは洋の東西を問わず同様である。

技法の変遷について見た場合、図柄や構図の変化のわりに、基本的なものは永い間変らなかつたと思われるが、今後は染色、織物、絵画、手芸材料、技法と融合発展して複雑な形態に変わってゆくことが予想される。

参考文献

- | | | |
|-----------------|-------------|-------|
| 1) 日本の美術 No. 26 | 日野西資孝著 | 1966年 |
| 2) 染色文様史の研究 | 明石染人 | 1931 |
| 3) 正倉院宝物展目録 | 日本博物館協会 | 1959 |
| 4) 日本国宝展目録 | 東京国立博物館 | 1959 |
| 5) 能衣裳 | 山辺知行 | 1963 |
| 6) 小袖文様 | 山辺知行・北村哲郎共著 | 1967 |
| 7) 玉川百科大辞典 | 玉川大学出版部 | 1963 |
| 8) 服装大百科事典 | 文化服装学院出版 | 1969 |
| 9) 日本文化史大系 | 児玉幸多著 | 1956 |